

村野次郎創刊

香蘭



2025年(令和7年)6月号

第 102 卷

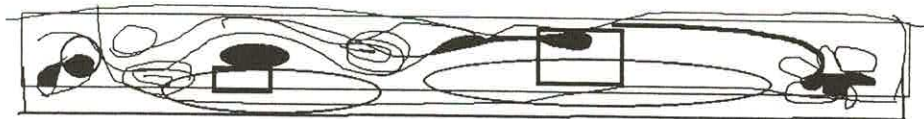
第 6 号

通卷 1134 号

二〇二五年(令和七年)六月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二卷第六号



香 蘭

2025年(令和7年)6月号
第102巻 第6号 通巻1134号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(118)	齋藤 俊子	表二
近詠十五首 浮き雲ひとつ	会 沢 ミツイ	2
作 品		
一		4
二		22
三		29
推薦香蘭集		35
香 蘭 集		36
作品一		
十首選(四月号) 渡辺礼比子選		14
作品二・三 十首選(四月号) 千々と久幸選		16
村野次郎への旅(182) 昭和期の「香蘭」(十七)	千々と久幸	18
続・酔風船(18) 負の能力(一)	千々と久幸	20
一頁公論(49) 短歌の魅力とは	能 城 春 美	21
安田恵子「からっぽの心」評(四月号近詠十五首)	千々と久幸	40
七 首 抄(四月号)	西野・小林(ま)・原(礼)・中野	41
焦 点(四月号) 時の流れを感じる歌	満 木 好 美	42
作 品 評(四月号)		
作品一	飯 島 智 恵 子	44
作品二	中 井 房 江	46
作品三	加 瀬 喜 美 江	48
香蘭集	塩 田 文 子	50
緑 地 帯	川 原 優 子	52
明宝研究会 第一六二回 三月例会 老いと死を巡る歌	鎌 田 ま ち 子	54
他誌拝見 139	千々と久幸	59
歌会及び会合・会員消息・他	関 哲 行	61
編集後記・新宿日記		
表紙絵……山口 蓬春「桔梗」		
目次・緑地帯カット……和田 和雄		

硝子戸に青葉せまりてすがすがし暑き日は

児をここに寝かさむ

『夕あかり』

清々しさと共に、師の愛情あふれるばかりの顔がみえる。この歌の前には「生れ児のいまだ見えざる眼の上にかぶさりて父の顔を見せしむ」があり、現在香蘭発行人である娘の中村富美子氏の誕生をよろこび慈しむ大正十一年の作品。若葉が風にそよぐ涼しいこの窓辺に昼寝などさせてやろうと思う心が、顔がやさしく伝わる先生二十八歳。その一年後は「香蘭」が創刊された年である。

コロナ禍のため一年遅れたが、令和六年の全国大会はこの百周年を祝う記念大会。二日目の午後からは来賓をお招きし、創刊一〇〇周年記念祝賀会が催された。祝辞に立たれる方々の中に、先生の孫の田中隆三氏の姿もあり「隆三」の命名は祖父次郎によるものと語り盃をあげた。詠われた母富美子氏は、高齢ながら健やかな日々であると話された。

浮き雲ひとつ

会沢ミツイ

ケーキ屋の古きベンチを貰い受け塗装施し菜園に置く

亡き友の娘の持ち来たる栗の實の縁頂くほんのり甘し

寺庭のイチヨウの枯葉の黄金色終のかがやき見せて明るし

吾もまた終のかがやき見せんかな裡なる光は見えないけれど

穏やかな顔に逝きたる義兄さんの最期の言葉は有り難うとぞ

小春日の縁側に来てひなたぼこ空にばかり浮き雲ひとつ

初雪にわが庭うつすら雪化粧あさの陽あびて消えてしまいいぬ

大晦日空は隈なく晴れ渡る恵しきことなど無かったように

正月の餅搗き幼も手伝うと折敷あらいて陽に並べ干す

八升の餅搗き終えて昼餉とす餡子に黄粉、海苔もち並ぶ

三が日終えて今年の目標を飛翔と決めたり誰にも言わず

ひと言随想 春

カルシウム摂らんと小魚食べる朝イワシの群れの映像を見る

寒き中いきなり咲ける蠟梅は春を呼ぶかの華やぎを見す

濯ぎ物春の陽のなか風に揺れ踊るかに見ゆ春のダンサー

吾が庭に鳩が降り立ち餌を食むつがいの鳩も逃げずに憩う

私はもうすぐ喜寿を迎えようとしている。

今のところ元気に動け、ヨガと短歌を楽しんでいる。また、近くの荒れ畑を借りて、少しの野菜と花を作ることが、よい気分転換になっている。

畑の近くにベンチを置いて、光を浴びながらの作業は、ささやかな幸福感を味わえるひと時だ。生まれて来て良かった、今は亡き父母に有り難うを言いたいと思う。

私の短歌は、今を楽しみ生きる喜びをかみしめながら、言葉の世界に一步步踏み込んでゆく営みに似ている。

・冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける 紀 貫之

右は、私の最も心ひかれる和歌である。冬の雪を春の花に見立てて詠い、冬ごもりの楽しみは、春を待つ楽しみでもあったのだ。このような歌境を目指したいと願っている。

四 選 者 の 作 品

さくら散る

平塚 千々和 久幸

深く散れとう声^{そのかみ}を往昔に聞かしよさくらいま七分咲き

散ることを一期^{いちご}としたる美しき時代ありしを語り継ぐべし

散り方もさまざまにして「無駄散り」というもあらんかさくら花に

散り惑うさくらは「非国民」などと蔑^{なみ}され世間に指弾されたる

さくらには怨みはあれどまことげに恐ろしきものは世間なりにき

散りゆきしさくらは枯れしも栄えしもありて一つの時代を終えつ

敷島のやまと心は滅びしが靖国神社のさくら満開

受験生われに「サクラチル」通知 茫茫として七十年前

施設の父

鎌倉 高 畠 憲 子

ひとところ温^{ぬか}き床ありさつきまでこの家の刀自が皿洗ひをり

入所せし父を見舞へば覚えたてのストレッチ^やなどを披露しくるる

朝床にストレッチする歌を詠む高橋睦郎^おは八十七歳

早逝の妻より実母と義母のこと語りて止まず施設の父は

「おふくろさん」を森進一が熱唱す お前も世の中の傘になれよと

昨夜濡れしリュックが干されゐる朝の空の青さをしみじみと見る^{きぞ}

白手ぬぐひ頭に巻きて竿持ちて綱元を継ぐコウちゃんが来る
鎌倉のコンビニに笑顔でレジを打つ人の名札に「北条」とある

鳥 影

我孫子 丸 山 三枝子

酸性の雨かも知れず寄せ植えの花も白蓮も濡れて光れる

ほどほどの寂しさなればよしとせん窓辺の桜ほころび始む

暗緑にボウルの若布ふくれゆく、さあ食べたまゑとは言わないが

当事者にあらぬやましき託ちつつ語りいるなり震災の惨

残し来し人思いしが駅頭に着くころはもう忘れておりぬ

花かざり（丸山コム之霊位）など添えておまえの納骨おわる

西空の向こうへ抜ける穴あるか鳥影すつと吸われゆきたり

おとずれし中学生になりし子の背丈はわれの背丈を越えて

五本指靴下

東 京 桜 井 京 子

辞めますとふことは寂しも電話にて静かな決意を聞かされてゐる

去りゆけるあなたとあなた寂しもよ暫し見あぐる三月の雨

六年の任期を終へてひと区切りせんせいと呼ばれて来たる六年

不揃ひに二ホンズイセン咲く丘のうへに風あり海よりの風

五本指靴下穿けば穿くたびに薬指、小指は離れ難しも

執着は愛にはあらず夕焼けのポストはどこかへ行きたいと言ふ

わたしとは違ふ誰かと生きて来た人と思ひぬふるさとは雪

週末より雨になるとぞああ春が来るのですねスマホを置きぬ

作品一 十首選



(四月号作品から)

渡辺 礼比子 選

・街上にわずかな風の舞いたり ハッピーニューイヤー行くところ
なし 千々と久幸

この歌から読者が思い浮かべるのは、正月になっても行く当てのない、孤独な老人の姿であろうか。しかし、これが等身大の作者像と読むのは早計だ。「私達は創作をしているのだ」と常日頃弟子を叱咤している作者であれば、彼がそんなに易々と個人的な寂しさを歌にするはずはない。恐らくこれは虚構である。もしかしたら、この日友人との新年宴会を終え、なお飲み足りなくて、馴染みの酒舗に向かつて歩いていくところだったかもしれない。それでは作者の真意はどこにあるか。「ハッピーニューイヤー」と「行くところなし」という反発しあうフレーズの上に立ち上がってくるのは、なんとも苦々しい、皮肉な気分である。例えば、先の読めない世界に生きている不安や閉塞感などを思い浮かべることが出来る。「街上のわずかな風」がどことなく不穏な気分を醸しだしている。

・「施設には行かない、ここで終はりたい」父の希望を砕く転倒

高島 憲子

鉤括弧で括られた父のセリフが切実に響く。年老いた親を自宅で介護するか、施設で看てもらうかは、誰しも迷うところだが、この

歌のようにやむを得ぬ状況となり、苦渋の選択を迫られるというケースも珍しくない。超高齢社会に生きる私たちは常に自らの衰えを意識しつつ、多くの課題を処理していかなければならない。省略の効いた簡潔な表現に透けて見える、子の思いが切ない。

・順調な快復と聞きかへりくる菜の花色の街灯の道

相川 公子

誰の具合が悪かったのか、どこへいつてきたのか、具体的なことは何も語られていない。いずれにしても病を抱えている親しい人を見舞った折、ひとまず「順調な快復」とを告げていると聞いた後の作者の安堵感が伝わってくる。「菜の花色の街灯」のイメージが温かく、どこかなつかしい味わいのある歌である。

・百年を生きんとすれば手つかずの十二年ありと思う元日

飯島智恵子

歌の批評をするときに「手つかずの表現」などというフレーズが使われることがあるが、この場合の「手つかず」も誰も手をかざしたことのない、栄光にみちた独自の未来というほどの意味であろう。作者はちょうど米寿になったところか。これからは老の坂をくだるばかりだとおおかたの人は覚悟を決め、終活などに励む時期であるが、彼女はそうした凡庸な老人とは一線を画す。これから先、自分を待っているはずの未知の時間を思い、期待に胸を弾ませる。作者の突き抜けた楽天主義には毎度ながら脱帽せずにはおられない。

・二年の喪明けて頂く年賀状減りおり死に支度すしこととう

伊藤美恵子

二年の喪というのは、二年つづけて身内に不幸があったということ

とである。喪中はがきを出し、年賀欠礼していた間に、世の中が変わったのか、或いは作者の同世代が老いて賀状仕舞いを始めたのか、喪明けの今年、届いた賀状の数が減っていた。それを寂しいとは捉えない。これで少しづつ終活が進められると、気持ち切り替える理知的な作者が、いたく魅力的に見えた。

・転びしを母は内緒のつもりだが崩れておりぬ身代わり豆腐

伊藤 康子

親の沽券にかかわるという思いからか、あるいは、子に心配をかけたくない一心からか、老人はしばしば自らのしくじりを隠すものだ。しかし母の持ちかえった豆腐が崩れていたことで、子は母の転倒を見抜いてしまった。但し、この娘は母の不注意を咎めたりはしない。「身代わり」という語に象徴されるように、母の怪我が大事に至らなくてよかった、というただそれだけと思う、心やさしい娘なのである。

・一月二十日真夜のテレビに炎吐くトランプといふ怪物を見つ

鈴木 桂子

二〇二五年一月二十日ドナルド・トランプが四年ぶりにアメリカ大統領に就任し、早々に記録的な数の大統領令に署名した。獅子吼するトランプの姿を「炎吐く」「怪物」とカリカチュアライズし、彼の危険性と、影響力の大きさを象徴的に描いている。読者の危機感を煽り、檄を飛ばしている歌と読んだ。

・新春の卓上にある冬みかん長い影引き輝いてゐる

関口 静子

時は新春、万物が新しくなった今、一個のみかんが、卓上に輝い

ている。しかしその数、色、大きさなどには言及せず、ただ、みかんの光と影にだけ注目している。今は輝いている美しいみかんもいつかは腐敗する。この長い影はみかんの内包して減びを予感させるものではないか。写真に徹したことで、物の本質に迫る、思索的な一首となった。

・一月も下旬となれば明るさの少し残っている退社どき

中村 美幸

何でもないことをさらりと詠み、読後にかすかな余韻を引く一首。夕方五時の空は師走なら真つ暗だが、一月も下旬になると日没までには少々間がある。退社時に見上げる空は、トワイライトタイムを迎えて美しく染まり、帰路の足取りも弾もうというもの。微妙な自然の移ろいを掬って見せたところに、永年のキャリアが光る。OL生活の哀歎も伝わってくる。

・「ミ」と化し燃やされゆるけるわが歌が学びし過去が灰になりゆく

室橋 玲子

燃やされたのは何だったのか、具体的には書かれていないが、例えば短歌ノートやメモの類、あるいは、月々の支部詠草のプリントではなかっただろうか。「燃やされゆるける」というところをみると、自ら燃やしたのではなく周囲の誰かによって処分されたものと考えられる。自分にとっては、体の一部のような大切な歌稿であっても、家族にとってはあくまでも「ごみ」でしかないところが辛い。自分自分の身の回りの始末ができなくなったとき、まっさきに周囲の人から切り捨てられるのが「短歌」の類だというのは、まことに身につまされる、哀しい現実である。

作品二、三 十首選



(四月号作品から)

千々和 久 幸 選

〈作品二〉

・手伝わぬ男ら家から追い出され暮れのドトール満員となる

小笹岐美子

さてこの場合、男らは被害者かそれとも果報者か。わたしなら当然後者だと答えるが、大方は前者ではあるまいか。家から離れられないオトコはいつの場合も難民になるしかない。当今は「一人遊び」が出来るかどうかでオトコの甲斐性が決まる。かつては「濡れ落ち葉」などと揶揄されたが、する仕事のない時をどう過ごすかがオトコの値打ちを決めると心得るべし。

だからと言って追い出した方も、コーヒー代を握らせて「してやったり」などと安心するのは禁物、「オトコは黙ってビールを飲ん」だりもする。この辺りの呼吸は世慣れた作者は承知の上だろう。

・埋み火のやうにほのかな温もりを求めて来たり古き茶房へ

澤田久美子

かつてこんな歌が流行ったことがある。「小さな喫茶店に／はいつたときも二人は／お茶とお菓子を前にして／ひとこともしゃべらなかつた」、日本の喫茶店文化の草創期の歌である。

今日では喫茶店は手頃な離れ座敷の感覚で利用されている。「二十分あれば喫茶店に行け」と、明大の斎藤孝センセーは言う。お陰で

わたしはこれで危うく単位を落とすところだった。

だがこの歌の主人公のような「ほのかな温もり」を求めて来るロマンチスト風の遊民もいる。上句の比喩はいささか古風で緩いが、年季の入った技巧を感じる。思わず「おやりになりますね!」と茶茶を入れたくなった。かねがね歌の上手さに注目している作家。

・これからは死ぬまで楽しく生きてゆく終活なんて二の次でいい

関 哲行

老いを嘆く歌は読み飽きた。同じ一生ならこの作者のように自由奔放に飛翔したい。終活も短歌の情緒もへったくれもない。前向きに闊達にこの瞬間を完全燃焼すればよい。

聞かずもがなの老いの身辺をわざわざ歌にして、うじうじ湿っぽい弁明をするよりは、この作者のように爽やかに爆発したい。小さな声で言うが、やせ我慢もオトコのタシナミの内、である。

・幾度もサイレンの鳴り東京は非日常も日常の中

田村 久美

下句の断定的な把握がいい。このウィットの上にな上句の情景が乗って成った一首、という感じの作りである。「非日常」はコロナ下で流行語になったが、この歌の「非日常も日常の中」という哲学を胸に刻んでおきたい。非日常が常態になったというのではない。日常の中に非日常を抱えてこそ彩りのある日常を手にすることが出来る、と言うのだ。人間は非日常の空間があつてこそ豊かな日常を生きることが出来る。

「サイレン」以下の上句は序詞と読めばいい。上句は具体がはっきり見えないなどと甘ったれたことを言うな。具体をイメージ出来る

かどうかは、読者の読解力（創造）にかかっている。

・お手製の柚子ジャム届きつつしんで清新町へかうべを垂れる

能城 春美

Oh no, you（おお、能城ー）と思わず呟いた。作品欄を贈られたジャムの礼状代わりに使うとは太てえ野郎！不貞野郎だが、このあつからんとした能天気さを「稚氣愛すべし」とするか、場所柄を弁えぬ礼儀知らずと見るかは、読者の倫理観次第。気紛れな作者に見えて娑婆の心得は堂に入ったもの。以下のコメントは省略。

〈作品三〉

・大寒は小春日のような暖かさ梅の蕾の膨らみでくる

生田 綱代

穏やかに詠い納めて、慎ましい生活者の顔が覗く。刺激に乏しいとか、毒が無いとか利いた風な口を利くな。現代人にはかつての農耕民族時代のような季節感はないが、こんなところに安らぎを感じるのも短歌の余録であろう。この種の短歌にそれ以上何を望むことがあるう。この種の歌を「香蘭調」と言ったのは今は昔。

・プーチンの狂気おさまらぬロシアより来たる鵜が砲音避けて

石川 詔子

四月号作品で時事詠（社会詠）を探してこの歌に出会った。何よりもプーチンやロシアに「矢報いたところがいい。だが歌の主意はロシアより避難してきた鵜への愛と同情にある。戦争とは無関係な鵜にまでカモにされては、プーチンも立つ瀬があるまい。

この辺りが（いわゆる）時事詠とは趣を異にした面白さである。真つ向上段からの時事詠を期待した読者には物足りなさが残るかも

知れない。しかし紛うかたなき時事詠である。

・遺骨抱く夫に続きて旅行く義母の守りし畑の脇を

小野香代子

細部の表現もさることながら一首の設定がいい。遺骨を抱えて墓地までは義母の守り通した畑の脇を徒でいくのだが、この葬列はまるでモノクロームの映画をロング・ショットで見える趣である。

わたしはふと村野先生の「父を埋むる日一首」の「矢羽根麦シルクハットに輝けば……」（歌集『夕あかり』所収）の葬列を思い出していた。あるいはこの一首に触発され発意されての歌か。

・ぬむれない夜にも憤れて昨晩は数える羊がどこかへ消えた

川久保百子

下句の軽いウィットで読ませる歌だが、もう聞き飽きた感じである。作者も快心の作とは思っていない。何となく員数合わせの感がなくもないのは、結句を中途で手放してしまったからだ。作者は目下「短歌渡世修行中」の身だと思えばよろしい。つまり、この先の期待値を含んでの評価だと心得るべし。

・いっせいに飛び立ちゆきし裸木に一羽残れる飛べない雀

中島由美子

「飛べない雀」の身の上をわが身に重ねて憐れんでいる歌。それゆえ一首全体が暗喩になっている。ただ構成に難があり「一、二句は「裸木が飛び立ちゆきし」と読まれてしまう。

誤解を招かぬようにするには「雀らが飛び立ちゆきし裸木に飛べぬ雀の一羽が残る」とでもするほかはあるまい。この作者も熱心に歌会に参加し「短歌渡世修業中」である。

村野次郎への旅 (182)

昭和期の「香蘭」(十七)

千々と久幸

前號に引き続き「香蘭」第五卷第九號(昭和二年=1927年)九月號の前月歌壇合評の続きを読む。

自然

尾山篤二郎

・屋根草の穂をふきとばす風さへもいとひて
一日こもらんとせり
・常ごとと物はいへどもいふうちにいきどほろしくなりにけるかも

(木枯) 承前 文句は長くなつたが、こゝに響けられた二作は少し有りがたくない。氏は今下宿にとちこもつて、古い虫の食つた本と首引きをやつてゐられるそうだが、仕事がかばかしく進行しない爲に神経がいらいらと荒れて來たんだらふ。

(二)の歌、いつ頃の歌かしらぬが、近作ならば屋根草はまだ青いにちがひない。その生氣潑らつたる草の穂を吹き飛ばす風ならいさ、

かの風ではない様だが、そうすると、(さへも)へ來て一寸衝突してしまふ。

(こもらんとせり)も氣になる所だ。こもつたかこもらなかつたかは問題ではなくて、こもらんとしたといふ事が歌になつた譯だが、兎に角歌だけよんだのでは、この神経異常の原因がはつきりしてゐないのだから、つんと應へるものがない。我々が尾山氏に求める歌ではない。(二)の歌も同じ事が言へる。

アララギ

藤澤 古實

微恙ありて

・わが胸の神経の痛みしづまらず息をころし
つといねむと思ひき
・かにかくにたましひの張りよわらむか今日
いちじくる胸もといたし

(敏夫) 蟹のやうに堅い甲羅を着た歌だ。武張つた、裨着用のそれだ。格調とか或はますらをぶりと云ふけれど、こんなものではあ

るまい。藤澤君程の人がこんな外形だけの歌を作つてゐるかと思ふと泌々として悲しくなる。アララギも愈末期であると思はざるを得ない。「わが胸の神経」成る程「痛む」のは神経に違ひあるまいが、かうして迄報告せずともよろしからふ。堅い言葉だ。第二首は論外だ。胸が痛かつた位で「たましひの張りよわらむか」と迄張り出さなくともいい。矢張作歌心裡に舊アララギの誇張癖とこけおどしがあるのだ。素朴を唱へるアララギがもつ陥つた力の夢があるのだ。

(松若丸) 私は當今諸種の雑誌に目を通してゐないから各々傾向に依つて批評を下すことは出来難い。只與へられた作品のみに依據して評することを一言お断りしておく。

(二)(二)かくも抽象的なことをこれまで意味の通づる様まじめ上げた巧さはあるが、これではまだ回顧文の一行に過ぎない。

余りに抽象的であり、獨りよがりて其形式韻律に於ても目にとめるほどのものはない。「胸の神経」「たましひの張」の如き言葉もこけおどしに過ぎぬ。瞑想的獨白ならばまだしも自己感情の煩悩或は感覺的なものは抽象に終止しては好意を持たれない。

橄欖

佐野 翠坡

・沼を越え野越え土手越え行く遠さたのしきりけりよしきり啼くも
・夕早も蚊遣りを燻す沼の家のみへ通りたり
煙りの中を

(木枯) 是は旅の歌であらふと思ふが余り感心した作では無い。

(二)の歌、(沼を越え野越え土手越え)とよんで来て、或は飛行機か鳥か蜂の如きものの歌になるのではないかと直感的にひびいたが、そうではなくて、佐野さんが、こつこつと一分間に三十間位の速力で歩いて行かれたたのであるらしい。そして沼の上にはたしかに橋がか、つてゐたんであらふ。(土手越え)はどうであらふ。こうなつてくると小川を越え、藪を越え、石ころを越え、とついでに並べたくなる、又この調子も昔の新体詩的である。佐野さんは何等の新鮮味を加味し得なかつた。更に、(行く遠さ)(たのしきりけり)(よしきりなくも)がごたごたとしてゐて統一がついてゐない。歩く距離が大變遠い。道べにはよしきりがなく、何といふたのしさだ。こう考へて見ると、遠さがどうも變である。御馳走があつて、大へんうまい、その上皿に山盛だ。

それがたのしい。こんな風なものか。
兎に角言葉から受ける感じが變に迷はさせられる。(遠さ)と強く切つて、又(よしきりなくも)と来るのはどうか。

(二)の歌の方が無難である。無難であるといふだけで、こつこつ安易さには妥協出来ない。(松若丸)氏の歌は實にゆきとどいた巧さがいづもあるやうに思ふ。(一)は場所的變化を第三句まで續けそれより転換の快調を出してゐるが、一体に小句切れが氣になる。更に第四第五句が融合してゐない。といふのは第四句の咏嘆と第五句の咏嘆との重複は決して有効ではない。結句は上四句の副詞句としては効果を充分發揮してゐない。(二)の結句も効果的ではなく反つて蛇足と思ふ。更に氏は第五句により多くの興味を有つのならば上句を改作する必要がある。燻り、蚊遣り、煙と同類語が離れて余りに多く有り過ぎるのにも注意すべきだ。

新設の「壺中の天地」の村野先生の「選を終りて」という小文を抜き書きする。

此頃甚だしく困る程の歌はなくなつて來た。其代り一種の型に捉えられたものが多くなつ

た。これはなかなか油斷がならないことである。其處にはもう新領土開拓の努力は認められない、之から成るべく形式的な安易なものは採らないことにしたいと思ふ。自分自身のもの、生き生きしたものの、何かしら求めようとしてゐるもの、さう云つた氣持の表はされたものはないか、數多い選歌を見る時、凡ての微温的のものは眼の前を急いで通り過ぎてしまふ。其中に何か光つたものはないかと探してゐる。

月によつて甚しく出來不出來のある人がある。推選欄も今後大いに變へてゆきたいと思ふが、歌が大いに進歩し或は變化して行く前には必ず一時停滯するものである。故に此月の不出來は今後の希望を示してゐるのかも知れない。只反撥力の如何が問題である。この意味で人選を大いに變動してゆきたいと思つてゐる。

原稿の文字の汚きもの、用紙を凡て綴らざるもの、メ切期日遲着のもの等調べても其人の歌に對する熱心さと注意深さが判るやうな氣がする、慚むべことである。

この意見、今日でも充分に通用しよう。

続・酔風船（18）

千々和 久幸

負の能力（二）

かつてわたしは『酔風船―Q氏のいたずら日記』（2017年、ながらみ書房刊）所収の「意味もなく飲む会」の中でこう書いたのだ。

柄谷行人は意味に憑かれた人間を論じた「マクベス論」（『意味という病』（昭50年2月、河出書房新社））の中で、「この意味に憑かれるという病は、『近代』からはじまったのではなく、むしろ『近代』を生み出したのである」というフレーズにいたく蒙を啓（ひら）かれたのだ、と。

爾來わたしは漠然とではあるが近代の根っこにある「意味が意味する」ものの根源を見つめてきた。そしてこのたび偶然ではあったが、『ネガティブ・ケイパビリティ』という発想に出くわした。

意味にこだわって言えばこの発想の根底にある思想も、意味からの解放と同一線上にある思想として読んだのだ。その概念を著者の常木蓬生はその著『ネガティブ・ケイパビリティ 答の出来ない事態に耐える力』（朝日新聞出版、2024年10月刊）の中でこう解説している。

ネガティブ・ケイパビリティ（negative capability）＝負の能力もしくは陰性能力」とは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処し

ようもない事態に耐える能力」をさします。

あるいは、「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることが出来る能力」を意味します、不確かさの中で事態や情況を持ちこたえ、不思議さや疑いの中にある能力。しかもこれが、対象の本質に深く迫る方法であり、相手が人間ならば、相手を本当に思いやる共感に至る手立てだと言う、と。

わたしはこれまでにない視点に大きに興味をそそられた。同時にわたしは反射的に、この国に古くからある「運・鈍・根」という諺を思い出していた。その意味は手元のどの辞書にも、「好運と愚直と根気。事を成しげとるのに必要な3条件としてあげられる」（広辞苑）などと説明されている。

一般世俗ではすでに流通しているこの諺の「鈍」という媒介項を理解するまでに、長い時間を要した。第一、この諺（故事）の出所がはっきりしない。次いで「愚直」になぜ価値を置くのかもしっくりこない。恐らくこれは合理主義や効率至上主義に絡め取られたわたしの先入主のせいだろう。

この国では「聡明才弁」（なかなずく才弁）は評判が芳しくない。論語では「巧言令色鮮（すな）仁」とされ、その逆の「剛毅木訥（とく）仁に近し」の方が上位に置かれる。つまりは「鈍」の方が尊重されるのだ。そこでわたしは「鈍」の真意は「にぶいこと。のろいこと」（広辞苑）や「感覚がにぶいこと。動作がのろいこと」（明解国語辞典）ではなく、周辺の事象に「過剰反応をしない」ことだとポジティブに捉え直してみることにした。さすれば「鈍」は「答え」の出ない事態に耐える能力＝ネガティブ・ケイパビリティと重なる。

一頁公論

(49)

短歌の魅力とは

—古の歌人に感謝を込めて—

能城 春美

これまで、自分のつまらない歌に嫌気がさして、こんな短歌を読ませるのは忍びないから、もう短歌を詠むのは止めて、読むだけの人になろうかしらと何度も迷いました。例えばピアノの音色は大好きだけれど上手には弾けないので、演奏会に足を運び、プラボ！素晴らしい！とピアノリストに大きな拍手を送る観客になるということです。

ではなぜそうしなかったのかと振り返りました。そして、他の芸術にはない短歌の特性ある魅力に思い至りました。そこで、大変お恥ずかしいのですが、私にとつての短歌の魅力を紹介させて頂きます。

まずは、歌会です。人が集い、顔を合わせ

て、歌評をじかに伝え合うことです。作者と評者が同席して評価を述べ合うことは、他の芸術にはほとんどありません。作者の小さな幸せを共に喜ぶ、反対に辛い悲しみにそっと寄り添うなど、心の交流が生まれるのが歌会です。また自分の引き出しにはない未知の鑑賞を聴けるのも歌会ならではのです。読者に負担をかけ過ぎるとか、全部作者が言ってしまうから、読者はああそうですかとしか言えないとか、厳しい歌評を頂くこともありましたが、作者がわからないので忸度なしの歌評を聴けるのが歌会であり、短歌の魅力の一つです。

次は、短歌は日記になりえる事です。最近では誰でもスマホで写真を撮ります。確かに一瞬で、日記の代わりにできます。けれど歌に詠んだほうが、遥かに鮮明に感動や思いを蘇らせ、写真では手の届かない最高の一枚に値します。更に、吸い込まれそうな朝焼け、可愛い花の芽の覚めるような薫り、畑の土の手触り、荒れ狂う波音、もぎたての果物を頬張った美味しさなど、五感の歓声をふたたび堪能できるのも、短歌ならではの魅力です。

さて、「詩による新しい自己の発見」という香蘭誌のメッセージがあります。歌を始めた頃は、全くその意味がわかりませんでした。正解とは言えないかもしれませんが、今おぼろげに見えているのは、歌を詠むことは自分と向き合い、見たくない自分も鏡に映し眺めることであり、自分の知らなかった自分を発見する糸口を手にするようになるよというメッセージなのかも、という答えです。だとしたら、短歌の素敵な魅力だと思います。

皆さんがそうであるように、村野先生が創立して下さった結社『香蘭』のお陰様で、私も短歌を通して沢山の有り難い出会いを頂いています。職場やママ友や友人とはまた違う語らいは、たまらなく愉快です。こうした時間を持てるのも短歌の大きな魅力でしょう。

最後は、文学が持つ共通の魅力ですが、様々な苦難の歌やそれを超えた歌から自然と生きたる術を学び、小さな喜びの歌から自分も頑張ろうと前向きな原動力を貰えることです。以上、好き放題に書かせて頂きました。ところで、皆さんの感じる短歌の魅力とは？